

老舍『王老虎』試論

渡辺武秀[†]

On Lao She's "Wang Lao Hu"

Takehide WATANABE[†]

概論

《王老虎》是老舍先生在1943年发表的“抗战”话剧的剧本，也是他的第八部剧本作品。

我曾经研究过八部老舍的抗战时期的剧本，根据从前的研究结果，我打算在本文中对此部《王老虎》进行分析，然后探讨老舍的主张、思想和创作方法等的特色。

《王老虎》写了“一个农民在抗战期间怎样由种地而变为兵，由怎样渐渐变为正规军，到怎样参加了国际战争。”（「到姚蓬子」《老舍书信集》）的故事。这部剧本的主人公——王老虎是一位由种地而后当兵的。关于当兵，中国原有一句俗语：“好铁不打钉，好人不当兵”。一般来说老百姓不想当兵。但是，在1942,3年抗战之中，这种想法会对抗战产生负面影响。

王老虎是个好人，还是当兵了。他当兵之后，会不会变为坏人去做坏事吗？他没有变坏。他最后当了一个抗日军人，为何会有如此结果呢？

我们可以理解，老舍打算通过王老虎的行动，让观众了解军人的情况而产生亲切的感情，把中国原有的当兵的不好印象变为好的印象。看完之后，大家的心里一定有了支持抗战的心。

Key Words: Lao She, war, Army

キーワード: 老舍, 戦争, 軍隊

はじめに

これまで老舍の日中戦争時期の一連の劇作品を論じてきた。^(註1)これに引き続き今回は1943年に発表された『王老虎』を取り上げる。^(註2)この作品が老舍にとって第八番目の劇になる。^(註3)これまでの劇は総て基本的には「劇を観客に見せることで観客の気持ちを『抗戦』（日本軍への抵抗の戦いの意味で使う）へと向かわせることを

目的に書かれたもの」^(註4)ということができる。この『王老虎』も、これまでの作品と同様、やはり、ストーリーの根底に「抗戦」は絶対であるという基準が横渡っており、これまで老舍が書いてきた劇と同じ系統の「抗戦劇」ということができよう。

だが、これまでの老舍の劇とは異なる部分がある。例えば、すぐ、この作品が農民出身の兵隊を主人公にしているということを指摘することができよう。これまでの劇には「農民」「兵隊」を中心に据え描いたものはない。^(註5)このことによって、これまでの作品にはない局面も描き出さねばならないことになる。すでにこの点にも、老舍が新しい試みに挑んでいるという姿

平成23年1月14日受理

[†] 基礎教育研究センター・教授

勢が窺える。

本小論では、これまで行った論考の成果を踏まえ^(注6)、この作品の構成、物語の展開を詳細に分析、検討し、この作品の表現の特徴、さらには作者の意図や主張を掴み、そして、ここからこの『王老虎』の作品世界を解き明かして行くことにしたいと考えている。

—

この『王老虎』の創作に至るまでの経緯、或いはまた作品の内容について、老舎自身が姚蓬子へ宛てた1942年7月14日付けの手紙の中で幾つか述べており、まずこれを以下に引用する。

内容については、近く亦五や清閣と相談させてもらうが、おおかた戦闘部分を減らし、一人の農民が抗戦時期にどうして農民から兵隊になり、またどのように次第に正規軍人になり、そしてさらにどのように国際戦争に参加したのかを書くことになるだろう。これはかなり面白い題材であり、また亦五もうまい具合にこんな経歴の人物なのだ。彼は内戦の時代、南北と転戦し、兵隊から士官に昇進した。抗戦後、上海で重傷を負い、辛酸を嘗め尽くし、後方に退いた。だから、士官、兵隊の生活については、彼はかなり詳しい。こんなふうだから、彼が物語を考え、清閣が構成を考え、その後で私が台詞を書けば、かならずや、立派なものになると思う。だから、彼ら二人に私との協力をお願いし、一度集団創作の実験を行おうと考えている。^(注7)

この『王老虎』は老舎一人で書くのではなく、蕭亦五、趙清閣との協力によって創り上げようとしていることを述べている。この『王老虎』はもともと蕭亦五に中篇小説があったらしい。老舎がこれにとっても感動し、劇に改編しようと考えた。^(注8)だから、老舎は手紙の中で、蕭亦五が「物語」、趙清閣が「構成」、老舎が「台

詞」(劇の創作)を担当することになっていると書いているのである。ただ、これまで老舎にこのような共著の劇がなかったわけではない。1940年に発表した『国家至上』がそれである。^(注9)だが、それも二人の共著であり、今回の三人というのは初めての経験である。

この劇は、蕭亦五の小説が基になっているとはいえ、手紙でも戦闘部分を削った述べているように、これまでの老舎の作家としてのキャリア、また文壇での地位などから考えれば、この作品に、創作の最終的などころ(或いは決定的などころ)では老舎の考えがかなりの程度入っていると考えることができると思われる。

ただいづれにしろ、現在、老舎がどの程度、蕭亦五の話を忠実に取り入れているのか、どの部分を老舎が「創作」したのかについては問題にしない。ただ少なくとも老舎がこの作品を書いたことは自体は動かせない事実であるのだから、やはり老舎の創作全体を把握する上では、この作品も「老舎の作品」の一つとしてきちんと考察しておくべきであろうということについては異論はないだろう。

では、このようにして書かれたこの作品はどのように評価されているのか。これについて、杉本達夫氏は、老舎の劇作品の成立時期などを含めて、以下のように述べている。

(一九) 四二年十一月発表の「閑話我的七個話劇」が、この劇については一言も触れていないので、合作作業がこの一文以降に進んだ可能性も大きい。執筆時期が定かでないのみならず、一篇の劇評も残されていないようで、上演されることなく終わったものと思われる。影の薄い作品なのである。^(注10)

杉本氏の文章によれば、この『王老虎』は「一篇のの劇評もなく」「上演されることもなく」「影の薄い」作品と見られており、この作品の評判は余りよく無かったようである。何故こうなのか。作品に何か問題があるのだろうか。こういったことも、この論考で言及できるかも

しれない。

二

この『王老虎』は四幕構成になっており、物語の時期、場所は以下のように通りに設定されている。

- 第一幕、抗戦前五、六年(民国二十年)(…西暦1931年…筆者注)初夏 河北某県某村
 第二幕 前幕から数日後、北京—武漢鉄道路線のある小さな駅
 第三幕 第一、二幕から、二、三年後(民国二十二、三年)(…西暦1933,4年…筆者注)春 劉園村の某紡績工場
 第四幕 抗戦二年目(民国二十七年)(…西暦1938年…筆者注)冬の夜 前線から二十余里のある小さな村

この物語の時期は1931年から1938年までになっている。この時期に、この劇の主人公、王老虎(以下「老虎」と書く)は兵隊になるのだが、まず、ここで、今回の作品分析に関わるので、軍隊のことに少し触れておきたい。「第一幕」は出身地の村が舞台である。「第二幕」で老虎は村から出て兵隊になるのだが、この時の軍隊は政府の軍ではなく、当時「軍閥」といわれた軍の一つでと考えるべきであろう。老虎はこのような軍に入るのである。当時、この種の軍隊には寧ろ匪賊に近い行動をするものもあったと考えて良いだろう。^(注11)「第三幕」の後半に老虎の部隊は功績によって、政府の正規軍に編入されることになる。「第四幕」は日本軍との戦い(つまり「抗戦」)の時期で、老虎の部隊は正規軍として「抗日」戦争を戦っているのである。

また、この劇が共同創作という面もあるのだろう、主人公の人物紹介がかなり克明に書かれている。少し長いが、以下にト書きのその紹介を全文を引用しておく。

男。河北の人。初めて我々と顔を合わせる時には、わずか二十四、五歳に過ぎない。太い眉大きな目、だが凶悪ではない。背が高く腕力が強い、声が大きく言葉はさっぱりしている。幾らも教育は受けてないが、すごく母親孝行である。家では、母親が厳しく躰けているので、決して悪いことはしない。家を出れば、悪くも、善くもなれる、というのは彼はすでに天真爛漫な狡猾さを持っているし、また北方農民の純朴な心根を持っているからである。事件に遭えば、細かに考えを巡らし、田舎の人がそうであるように、慎み深い、だが、感情が高ぶると、利害の計算を忘れ、興奮して我が身を顧みない。もし農村が駄目にならなければ、彼は必ずや世に比類無き農夫となって、ミミズのように土地を耕し肥やしていることだろう。農村が再び彼に食べる物を与えなければ、機会に乗じて、彼はものすごい土匪になるかも知れないし、とても素晴らしい兵隊になるかも知れない。彼がどうなるにしろ、どのみち彼の本質は深厚純朴である。どうにもやむを得ない以外には、彼は人を欺こうとは思わない。彼を正しい道に導く人がいれば、決して困苦を避けることなく、道のために死ぬだろう。見たところ、時には、彼はいい加減で、全く構わない。だが、その実、それはまさに彼の忠誠、勇敢な精神の現れなのである。^(注12)

この作品は、この農民の老虎という人物が後に「兵隊」なり、やがて如何に成長して行くかの物語になっているのである。

次に、この作品は、どのような作品構成になっているのか、そこから窺うことのできるこの作品の創作意図はどういうものか、このところを明らかにしたい。

老虎の住む農村は疲弊し、特に土地をほとんど待たない農民は、金がないどころか、食べる物さえも無く、日々野草しか食べられない状態になっている。だから、貧しい老虎のような農村の若者たちは、自分が生きて行くために、も

はや農村を離れて都会に出、どうにかしてお金を稼ぐか、或いは兵隊になるしかないというところに追い込まれているのである。

ところでこの「兵隊」であるが、日本の「兵隊」に対するイメージと中国のそれはかなり異なっているように思われる。中国には「上等の鉄で釘は作らないし、良い人は兵隊にならない」^(註13)という諺もあることから分かるように、中国では古くから「兵隊」に対するイメージは良くなかった。「兵隊」は、社会でどうにも食えなくなった連中が仕方なくなるものであって、このような理由でなった「兵隊」たちは、この作品にもあるが、実際に、しばしば平気で庶民の物を略奪したり、庶民に暴行を加えたりした。少なくとも、この諺は、庶民たちがこのように受け止めていた証拠となる。この作品を理解するには、この「兵隊の負のイメージ」が中国社会に長いこと存在していたことをまず知っておかねばならない。

この作品がこれを問題にしていることは次の引用文で知ることができる。次の引用文は、同じ村に住む友人の趙禿子が老虎に自分のように「兵隊になれ」という勧める台詞である。

趙禿子：兵隊になれ。兵隊なることこそが、元手の要らない商売なんだ。食べる心配はしなくて良い、着る心配も要らない。欲しいものは何でもある。運が良ければ、兵隊になって、たとえ負け戦であっても、火事場泥棒をして、一万、八千の大金を手に入れれば良い。そして、戦争のないところに行って、鉄砲を放り出し、民間服に着替え、高飛びをして、賑やかな波止場に行って住み、嫁を貰うことにする。それからは、毎日劇を観るのでなければ、カードをする。餃子を食べ飽きれば、卵チャーハンに換える。家で食事を作るのが面倒くさければ、レストランに行って食べる。こうしていれば、誰もが見て羨むだろう。だが、誰にもその金がどこから来たのか分かりっこないさ。(非常に得意になり、まるで一切が事

実になったかのようなのである。) ^(註14)

いささか誇張はあるが、この考えは一般に通用していたと見るべきである。たとえ貧しい農民であっても兵隊になり、運が良ければ、夢のような良い生活ができるようになるかもしれない。だから、このために趙禿子は兵隊になろうとしているのである。

これに対して主人公の老虎はやはり同じように貧しいが「絶対に兵隊だけにはならない」と宣言する。この理由を以下のように述べている。

王老虎：俺のおつ母さんは兵隊が大嫌いだ。おつ母さんが俺に言ったことがある。「老虎や、忘れるんじゃない！いいかい、大きくなって何をやっても良いが、兵隊だけにはなるんじゃないよ。兵隊はロクなもんじゃないんじや。それにみんな鉄砲の弾を食らって死んでしまうのだぞ！」そうなんだ！他に道を考えよう。兵隊だけには、俺は絶対にならんぞ！^(註15)

ただ、老虎は自分が兵隊に嫌悪感を持っているわけではなく、あくまで母親の言葉を信じ、それに従っているだけなのである。

同じ村に住む若者の一方は「兵隊になる」ことを主張し、一方は「絶対に兵隊にならない」ことを宣言している。このことから、この劇では、趙禿子が「略奪」「暴行」といった兵隊の「負のイメージ」をそのまま映し出す役割を担っており、一方、王老虎の方がこの兵隊の「負のイメージ」を次第に払拭する役割を背負って登場していると考えられるように思う。このように最初に、趙禿子と王老虎との対決という形が図式的に暗示されている。



何故このような形にする必要があるのか。こ

の作品執筆当時の 1942 年、中国は「抗戦」の真っ最中である。この「抗戦」に勝利しなければならないのである。それには、まず現在も根強く残っている「兵隊の負のイメージ」を払拭する必要がある。もし兵隊の悪しきイメージが残っていれば、一般の人は「兵隊」になり「抗戦」へ参加しようと思わないだろうし、また国民の「抗戦」への支持をも望めないだろう。

この作品で、作者はこの「兵隊の負のイメージ」を変えようとしていると思われる。このために、劇で、現在の中国の兵隊はすでに旧態依然のものではなく、素晴らしい兵隊が居て、その兵隊は住民や国を守る高い意識を持っていることを観客に示し、観客にこのことを心から納得させようとしている。こうすれば、観客は従来の兵隊に対するイメージを変え、兵隊に親しみを持ち、この結果、兵隊と一丸となって日本軍に立ち向かって行こうという気持になるだろうと考えているのである。

この作品がこのようなものであるとすれば、この劇では、趙禿子が観客の誰からも嫌われ、他方、老虎は誰からも支持され、愛される「立派な」人物として描き出さねばならないことになる。作者は、このような課題を乗り越えるために、老虎をどのように描いているのだろうか。

三

この作品を一読すれば、主人公の老虎は完全無欠の理想的な人物としてではなく、寧ろ多くの欠点を持った、いわば乱暴者として描き出されていることに気づく。時には人を殴ったり、人の物を盗んだりもする。

① 〈老虎は乱暴者であるが、悪い人物ではない。〉

例えば、農村にいた頃、弟の鉄牛を首を絞めて殺してしまいそうになる事件も引き起こしている。それが以下の場面である。

柳条子：(災いを恐れ、大声で叫ぶ)王お婆さん！
王お婆さん！老虎が鉄牛を殴り始めたのよ！(返事がないので左に走る)王お婆さん！
王お婆さん！二人が喧嘩をしている！(振り返ってみる、老虎が拳や脚で殴ったり蹴ったりしている)王お婆さん！殺人事件が起こるわよ！(慌ててはいるが、自分から進み出て喧嘩を止めようとはしない)

王母：(手の一方に棒を持ち、一方に小さな籠を提げている。その籠の中には野草が入っている。よろよろしながら、左から走って来る)何事だい？何事なんだい？

柳条子：すぐ来てよ、王お婆さん！殺人事件が起こるわ！

王鉄牛：(すでに老虎に首を絞められ、反撃も出来ず、ウンウンと唸っている)

王母：(急いで杖で老虎を叩く)老虎！老虎！はやく手を放さないか！

王老虎：(言われたとおりに手を放し、柳の下に気をつけの姿勢をして立つ)

王母：お前は弟を絞め殺す気か。その子はお前の弟だよ！(籠を臼の上に置き、手を震わせながら鉄牛を引き起こす。老虎を続けて罵る)あの方が亡くなった後、お前が一番年上になっているんだよ、それなのに、こんな馬鹿なことをして？棒でお前を殴り殺したいぐらいだ！(言いながら、また老虎を棒で殴る)

王老虎：(棒で殴られ何も言わない) ^(註16)

鉄牛は弟であり、もちろん、鉄牛を殴るにはそれなりの理由があった。弟が兄の老虎を罵ったのである。罵ればおそらく喧嘩になるだろうという展開ではあった。しかし、こんなふうに、身体が大きく腕力も強い老虎には、このような騒動を引き起こす危うさがいつも付きまっっている。だが、これが却って観客を引きつける一つの要因になっているのではないか。観客にとって、老虎はどうにも「気になって仕方がない」存在になるように見える。

② 〈老虎はとても「母親孝行」である。〉

更にもう一点、この引用部分で注目しておきたい。それは、老虎の父親は既に亡くなっていること、また、このためか、老虎は母親の言動、行為に対して全く反抗もしないし、一言も言い訳もしないという点である。前掲の人物紹介にもあったように、彼は強い「母親孝行」の気持があるので、彼にとって母親の意見、或いは母親の存在そのものは絶対なのである。だから、これからも、基本的には、あらゆるものに対する彼の「是非」の判断は「もし母親だったらどうするか」「こうすれば母親は喜ぶか」、或いは他人であれば「母親をどう扱ったか」という処で行われることになる。この点が老虎のもう一つの特徴である。^(註17)

この老虎の描き方の根底には、何にもまして「母親の言いつけをしっかりと守る」「母親を非常に大事にする」といった人物には決して悪い人はいないという考え方が横たわっているように見える。この老虎の考え方、態度が人々に与える印象には一定の普遍性があるのではないか。このことを作者は知っており、この部分をこの劇の「農民」という主人公の創作に取り込んでいるのである。まさにここからも老虎が「善良」だという印象は生まれていると考えることができる。

四

老虎は、村から出るとき母親から「何をしても良いが、どんなことがあっても兵隊にだけはなるな」^(註18)と言われていたにもかかわらず、どうして兵隊になってしまったのか。この顛末を描いているのが第二幕である。

老虎は大都市に行くために汽車に乗ろうと張庄の駅に来た。だがこの時まだ行く先を決めていなかった。駅で、たまたま同郷の女性、玉姑に出遭う。そこで、玉姑の話を聞くうち、自分も玉姑の行こうとしている劉園に行くことを決

める。その時、そこに待っていた男の乗客の一人が玉姑に絡んできた。これを助けようとして老虎とその乗客と殴り合いの大喧嘩になってしまった。ところが、やがて列車が来て、喧嘩相手の乗客は巧みに逃げて列車に乗って行ってしまう。また玉姑も混雑で離ればなれになり、列車で行ってしまった。ただ、老虎だけが鉄道警察官に捕らえられそこに留め置かれたのである。

そこへ兵隊を募集している軍人がやって来たのである。老虎は、この大騒ぎで罪を犯したように軍人から思われ、身体検査を受けることになる。ところが、この検査で、ポケットから、村を出るときに母親から貰ったイヤリングが出てきた。この品は農民の若者には身分不相応である。疑いは深まる。銃殺されるかもしれない。ここには誰も味方はいない。老虎は窮地に陥る。この遣り取りがユーモラスに描かれている。

ちょうどそこへ兵隊になるために同郷人の趙秃子がやって来た。この趙秃子が老虎と、募集に来ている軍人の孫小隊長との間を取り持つ。

王老虎：(孫に向かって)……(略)……あなたの手にあるのは俺のおっ母さんのもんだ。……(略)……(趙に向かって)おっ母さんのイヤリングが原因で、俺は今困ったことになっている。あの(頭で指し示す)隊長さんが手にしっかり握って俺に返さないのだ！趙秃子、俺を助けてくれ、あの人が返してくれるなら、俺は何だってする！

孫小隊長：(イヤリングを示し)その通り。イヤリングは俺様の処にある。俺様はあいつに返してやっても良い。でも、趙明昆、あいつに言え、イヤリングが欲しければ俺様について行って兵隊になれ、もし兵隊にならなければイヤリングは俺様のものだ、とな。

趙秃子：分かりました、小隊長！(虎に向かい)聞こえたか？老虎！小隊長ははっきりしている。お前、どうすれば良いか分かるな。俺たちについて行って兵隊になれば良いんだ。兵隊になれば、食べ物も飲み物も保証されるぞ。……(略)……運がよけりゃ、明日にも

大金が転がり込むかも知れない。大金が手に入れば、お前のおっ母さんに金のイヤリングだって買ってやれるぞ！

王老虎：（ちょっと考えて、イヤリングのために、承知するしかなかった）よし分かった、でもお前と一緒になければ、俺は兵隊にならないからな！趙禿子、まずあの人からイヤリングを返してもらって来い！（註¹⁹）

このように、老虎が兵隊になったのは、命より大事にしている母親のイヤリングを軍人から自分の手に取り戻すためだったのである。つまり、皮肉なことに、母親から「兵隊だけにはなるな」といわれていたのに、その兵隊になってしまったのは、実は「母親」のためだったということになるのである。ここに「母親孝行」の性格が有効に働いている。この展開で、観客が老虎の「母親」への強い気持が理解できれば、観客は「王老虎が兵隊になるしか方法がなかった」ことを受け入れるはずである。

ただ、それでも、第二幕では「兵隊」の負のイメージはそのまま残されている。老虎は、自分から望んだ入ったわけではないが、あくまで、その負のイメージのままの旧態依然の兵隊集団の中に入って行ったのであり、この時点では、老虎が兵隊の負の部分に染まり、その兵隊たちと同じように彼も庶民から略奪をし、庶民に暴行を働く人物になってしまう可能性がそっくりそのまま残されているのである。この幕にはこのような老虎の将来への「不安」「心配」がまだ残っている。作者は、明らかに、この展開を意識して使っており、これで観客を結末に引っ張って行こうとしている。

五

第三幕は、第二幕から数年後の老虎がどのような兵隊になっており、さらに将来どのような兵隊になって行くのかということを描き出している部分に当たる。

老虎はすでに小隊長に昇進している。まさにこの老虎の小隊が劉園で保安隊と組んで紡績工場を襲おうとしている。

① 〈趙禿子、老虎に工場襲撃をするよう説得〉

だが老虎は迷っている。この工場襲撃に加わるか否か。なかなか判断がつかない。襲撃に躊躇する王老虎に向かって、趙禿子は工場を襲う正当性を以下のように述べる。

趙禿子：……(略)……聞くが、お前に良心があって、上の連中のため何十回と命がけて戦った。だのに、体中に傷が残った以外に、上層部は俺たちに何をくれた？(間を取る)おお！そうだ、お前は小隊長に昇進したなあ。今や、毎月二十五元の金をもらえる“小隊長”さんだ。小隊長閣下殿さん！でもな、お前に、もっと聞くが、お前は一体いくらのお金を、大切にしているおっ母さんに送った？お前自身が食べているのはどんなもので、住んでいるのはどんなもので、着ているのはどんなものなんだ。今になっても、嫁ももらえてないじゃないか。(虎が答えられないのを見て、甚だ得意になる)良心だって、何が良心だ！そんなもの何にもならない。あの高い官職を得て、大金を掴んだ連中を見ってみろ。毎日食べるのは外国の料理、着ているのは西洋の洋服、住むところは高層のマンション、そして七、八十人のお妾さんを抱いて寝ていやがるだぞ。くそつたれ、連中の何処に良心なんかあるかってんだい。孫小隊長だってそうだ。官位こそ上がってないが、金はかなり稼いでいる。先月、あいつが母親に一揃いの銀の腕輪と、五十元の現金を送ったのを俺はこの眼で見た。一日中公邸に住み、女と遊び、あの手この手で好い加減に処理し、食べている。時には部下があいつに金を届ける。あいつも気分が良い、部下も喜ぶ。ところが、お前ときたらどうだ、俺たちと同じようにト

ウモロコシの饅頭を食い、粟のおかゆをすすっている。部下たちが時に鶏をしつけいたり、大根を盗んでくれば、目をむいて怒りやがる！これじゃ自分で苦勞をするばかりか、部下たちにも自分と同じように罪を受けさせるようなものだ。これは、一体、どうしてなのだ。

王老虎：(とても悲しそうに)どうしようもないのだ！おっ母さんに孝行しようと金を送ろうと考えたこともあった。でも、庶民がひどくかわいそうなのを見ると、とても手を出すことなど出来なかった。

趙禿子：おや！お前の腹の中に仏が住んでいるなんて思いもしなかった。こんなふうなら、すぐに布団を畳んで家に帰った方がいいんじゃないのか。兵隊は殺人、放火を生業とするのであって、徳を積み、善を行うことをするもんじゃないからな。^(註20)

実はこの紡績工場を襲う計画に深く関与しているのは王老虎ではなく、今では老虎の部下になっている同郷の趙禿子であった。この趙禿子が老虎を説得している。

要するに、趙禿子の説得は、軍隊の中に、自分たちのような農民出身の兵隊が真面目に「良心」に従って行動していることが「馬鹿らしい」と思ってしまう状況があるということを根拠にしている。もしこれが事実であれば、その農民出身の兵隊が「良心」を放り出すのは当然であり、誰もその兵隊が自分たちの欲得のために行動することを非難することはできない。まして、軍隊にそんな「馬鹿らしい」状況があるのに、農民出身の兵隊である自分たちだけがひたすら真面目に「良心」に従って行動するなどということは「もっと馬鹿げた」ことである。趙禿子は自分たちのような兵隊が「良心」に従うことの矛盾をこのように述べている。この部分は、この軍隊の状況が、「兵隊の負のイメージ」を変えようと思っている兵隊の大きな障害になっていることの指摘とも取れる。

老虎は、この趙禿子の説得を受け入れ、当地

の保安隊や孫小隊長の部隊と組んでこの地の紡績工場を襲うことを一旦承諾する。

② 〈玉姑、工場を守るよう老虎を説得〉

ところが、ちょうどこの時に、以前、張庄の駅で離ればなれになった玉姑に遭遇する。玉姑はこの町に住み、老虎たちが襲撃しようとしている紡績工場で働いていたのである。玉姑は、老虎が兵隊になっていることを知り、まず、老虎を含む、この村に駐留している兵隊たちの余りに無法な行為を痛烈に批判し始める。

玉姑：私には耳も目もあるから何でも知っているわよ。あなたたちの部隊はこの劉園の村にいて、一日中、鶏や犬を盗んだり、あらゆる手段を使って強盗を働いているでしょう。村じゅうが大騒で、治安が乱れ、みんなあなたたちの皮を剥げないのを残念に思っているぐらいなのよ。だのにあなたは、どんな顔をして、自分は庶民に申し訳が立たないことはしてないとか、国家に申し訳が立たないことはしてない等と嘘を言っているの。本当に、全く、あなたは何て恥知らずなの！（一気に背を向けて行ってしまおうとする）

王老虎：ああ、そのことか！それは孫小隊長だ、あいつがやっていることで、俺はこれまでそんなことはしたことない！（きまり悪げにし、その後、追いかける）^(註21)

ここ柳園にいる玉姑の見た「兵隊」はまだ負のイメージ通りのものである。このような中で老虎のように「自分たち」はそのような「兵隊」ではないと主張することは難しい。主張しても庶民は信じない。ここにも「兵隊の負のイメージ」を払拭する困難さが窺える。

では老虎たちが襲撃しようとしている紡績工場は一体どのようなものなのか。

王老虎：(頭を搔いて)まだ聞いてなかったが、(こ

の工場は誰が開いたのか知っているかい。

玉姑：（厳しく）私たちの中華民国が開いたのよ。政府が日本製綿布に対抗しようと出資してこの紡績工場を開いたのよ。実業を振興し、利益を挽回しようとしているの。あなたたちは同じ中国人なのに、どうして勝手気ままに中国の実業を自分で打ち壊そうとするのかしら。（註²²）

玉姑は、この工場で勉強をした唯一の知識人としてこの作品に登場している。ここでは、玉姑は、一旦趙禿子の側に引っぱり込まれた老虎を、今度は「工場を守る」側に引き戻すという役割になっている。従って、この幕では、玉姑の説得力、さらに正しい道の明示が、この場面の一つの見せ場になる。

王老虎は迷っているのである。そこで玉姑に、物事が正しいか正しくないかの判断の基準を一体どこに置けばいいのか、と問いかける。

玉姑：とっても簡単よ！ただ良心に従って行動すればいいのよ。そうすれば、第一に国家に申し訳がたつ、第二にお母さんが知ったら喜ぶわ。第三に巧くやれたら、昇進することが出来るばかりか、賞だっってもらえるのよ。よく考えてご覧なさい。どの道を行く方が、引き合うのか。（註²³）

趙禿子は「良心」に従うなど馬鹿馬鹿しいと否定した。これと逆に、玉姑は「良心」に従うことを勧めている。「良心」に従えば、「国家」にとって良く、「母親」も喜び、そして「褒美」だってもらえる、だから正しいと述べる。この説得にも「母親」が出てくる。ここは農村出身の兵隊に「国家」と言っても理解できない。それより寧ろ「母親」を出す方が容易に理解されると玉姑が判断していると解釈すべきだろう。

また、王老虎は、工場内部の人物が、襲撃グループに内応していることを玉姑に明らかにし、彼女に、工員たちは工場に不満を持っているのではないか、工場が工員たちをから搾取してい

るのではないか、の説明を求める。これについて、玉姑は次のように述べる。

玉姑：（驚いて）男子工員？それとも女子工員？

王老虎：男の工員だ！

玉姑：全く！あの人たちときたら。一日中騒動を起こそうと企んでいるのよ。工場は女子工員が男子工員より多くて、女子工員の方が仕事が真面目なの。だから女子工員の成績が男子工員より良いのよ。だから当然だけど、工賃は彼らより高いわ。これまで何回かあの人たちは工場長に待遇平等を要求したの。でも、工場長は「あなた方が以後サボったりしないなら、工賃を増やして上げましょう」というふうに答えたわ。こんなふうに、自分たちの痛いところをつかれたもんだから、あの人たちはとても怒って、腹いせに、あの手この手を使って工場を掻き乱そうとしているのよ。ああ！中国の実業には、どうしてこんなに多くの敵がいるのかしら！（悲しそうに言う）

王老虎：（彼女が悲しんでいるのを見て、自分もどういう訳か一緒になって眉を顰める）それで、玉姑、この騒動を先導しているヤツは一体誰なんだ？

玉姑：焦というの。でも名前の方は忘れたわ。（突然思い出し）そう、そうだ！その人には、あなたも遭っているわ。あの年、ほら張庄という駅で私をからかい、その後あなたと喧嘩になった人物がいたでしょう、あの背の高い人よ。

王老虎：（思い出して）そうか！あいつのおかげで、俺は警察に捕まることになったんだ！阿片吸いのようなひよろ長い顔の。あいつか。喧嘩の時、俺を蹴っ飛ばしやがった。全くここで遭うとは思ってもしなかったな、あの馬鹿野郎と。「仇にはよく出遭うもの」というが、よし、すぐあいつの処に行行ってケリを付けてやる。（立ち上がってすぐ行くこととする）（註²⁴）

劇では、玉姑は目の前の王老虎を説得しているのだが、実はあらゆる層の観客がこの展開を見、玉姑の話の聞いている。玉姑は、この観客にも最後には「工場を襲撃しては駄目だ」ということを心から納得させなければならないのである。もしこの説得が成功しなければ、この劇は成立しない。

③ 〈老虎は最後にどうなったか。〉

この劇では最後に老虎は玉姑に説得される。ちょうどそこへ趙禿子が現れる。趙禿子は玉姑が老虎の考えを変えてしまい、すでに老虎が工場を守る側に回ったことを知り、腹を立て玉姑に殴りかかる。だがしかし、老虎に却って地面に蹴り倒される。

この後、老虎は自分の部隊を引き連れ、工場に向かう。一方、趙禿子の方は、老虎が不在の時、その場から逃走してしまう。

この幕は、老虎がこれまで一緒に同じ軍隊で行動してきた趙禿子と決別し、工場で勉強をし、新しい考えを持った玉姑と親しい仲になるという展開になっている。このことは、趙禿子が兵隊の負のイメージの体現者であったのだから、老虎は古い軍隊の負のイメージとの決別したということになり、一方、玉姑と親しい関係になったということは、玉姑は「良心」に従うこと老虎に勧めており、また新しい知識も持っているので、ここに来て、老虎は「良心」に従う新しい兵隊へと脱皮したという意味を持つことになる。これまでとは違う新しい老虎が誕生したのであり、彼の率いる部隊も変わったのである。

六

最後の第四幕は抗戦二年目、つまり1938年の設定になっている。老虎の部隊は柳園での功績によって中央軍の編入され、彼自身は中隊長に昇進している。

現在、老虎の部隊は前線のすぐ近くにいるが、

彼は日本軍との戦闘ではなく、軍隊の背後に蠢く漢姦たちを捕らえる任務に就いている。ここでは、この任務遂行を通して、さらに老虎に兵士としての苛酷な試練が訪れることになる。

場面は事務室兼寝室から始まる。老虎の事務室兼寝室に忍び込み、そこから地図を盗み出した人物がいた。趙禿子である。この地図を日本軍の処に持って行こうとしたところを捕らえられた。趙禿子を捕らえて取り調べるうち、意外な事実が彼の口から話される。

趙禿子：俺は間違っていた。老虎、俺たちが同郷人だということに免じて俺を逃がしてくれないか！

王老虎：ぺっ、俺にはお前のような漢姦の同郷人などいない。

趙禿子：同郷人が漢姦だから自分が恥をかいたなんて思うなよ。じゃもしお前の弟が漢姦だったらどうなんだ？

王老虎：(驚いて)鉄牛が？

趙禿子：そうだ、鉄牛さ。あいつは俺より古株で、地位も高いんだ。他に女の相棒もいる。あいつの女だ。お前も知っているぞ。お前と付き合ったことがある、あの女だ。

王老虎：柳条児か？連中は何処にいるんだ？

趙禿子：高昇棧だ。六号室の部屋に居る二人がそれだよ。(註25)

王老虎と趙禿子の「現在」が極めて対照的である。王老虎は国を守るため「抗日」戦争に参加し、一方趙禿子は「漢姦」になって日本軍と結びついている。ここに来て「良心」に従ったか、或いは「金儲け」に走ったかが将来を分けた。「良心」に従った者は「抗戦」に向かい「金儲け」に走った者は「漢姦」になってしまったということになるだろう。

漢姦として捕らえられた趙禿子が「同郷人」ということで自分を逃がしてくれるように老虎に頼んでいる。ここではこの部分が問題になっているのである。

中国では人々は同郷人、肉親、親類との繋が

りを非常に大事にする。日本人の観客には理解しにくいかもしれないが、日本人が考えているよりもっとこの繋がりが中国人には大事であって、もし同郷人、肉親、親類に何かあれば、その人のために一肌脱ぐのは当たり前のことである。時には、たとえ法律に触れるようなことでも、目をつぶることもある。趙禿子がさすがろうとしているのは、まさに中国人のこの部分なのである。

だが「抗戦」という状況下では違ってくる。「抗戦」の勝利のためには「同郷人、肉親、親類」といった繋がりをも切り捨てることを求められることがある。その一つが、趙禿子のように、もし「同郷人」が「漢姦」だったら、という場合である。

確かに、現在、日本軍が中国で理不尽なことを行っており、多くの人々がその日本軍と戦っている中であって、日本軍のために働くような人物は、たとえ「同郷人」であっても許すことは出来ない、切り捨てねばならない。このことは分かる。だがしかし、もしその人物が自分の「肉親」である場合はどうか。しかもその「肉親」が漢姦になったのはやむを得ない事情があったことが十分に理解でき、さらにその「肉親」には「素晴らしく良いところ」があったとしても、それでも「漢姦」として、きっぱりその「肉親」を切り捨てることができるか。この判断は、中国では特に、理屈で言うほど、それほど簡単ではないのである。この劇の最後の幕でこのような問題を取り扱っている。

この「肉親」というのは、漢姦として捕らえられた弟の鉄牛である。

七

ここでは、老虎の弟の鉄牛の描き方をできるだけ詳細に見て行くことにする。

鉄牛は最後に銃殺されるのだが、このような結果になってしまうには、柳条児が大きく関わっていると考えられる。それ故、まず、この柳

条児がどのような女性として描かれているのかを明らかにしておく必要がある。

①（柳条児はどんな女性か。）

もともと柳条児と老虎と鉄牛、三人は三角関係であった。

鉄牛は、この物語の最初の、兄の老虎が村に居る頃から、老虎に反抗的である。それは鉄牛が柳条児を好きだからということに端を発している。もともと老虎もこの女性と交際しており、三角関係になっていた。だが、鉄牛は、それを知りつつ、どうしてもその女性を兄に譲ることができないのである。

では、この柳条児はどのような人物なのか。このことを知る台詞が第一幕にある。ここで、老虎の母親が柳条児に次のように言っている。

柳条児：わたしは、喧嘩するなって言い続けているのに、二人ったら、すぐ、殴り合いを始めるのよ！

王母：（怨んで）あんた、何を言ってるんだい。こんな大きな娘が、二人を犬猫みたいにからかって。あんたがいなければ、二人だって喧嘩なんかしっこないんだ。わたしが本当にそのことを知らないとも思っているのかい！（注26）

この台詞から窺うことのできる柳条児の性格の特徴は二つある。本人は気づいていないかもしれないが、一つは彼女が話す時に自分をまず「良い子」の位置におくということである。もう一つはしばしば兄弟二人の感情を弄び、二人に喧嘩をさせるように誘導するということである。この性格を老虎兄弟の母親はちゃんと見抜いているのである。

それから7年経ったとされる第四幕でも、この柳条児のこの性格は変わっていない。例えば、以下の場面がそれである。

柳条児：（とっさに良い考えが浮かぶ）老虎、お前

は本当にひどい人だね。昔のつきあいは出さないが、今はお前の弟の嫁だよ。私を助けておくれよ。弟のために子供を産んであげるんだよ。

王老虎：(驚き喜んで)何だって、子供ができてゐるのか。

柳条兎：(とても色っぽく)そうなのよ、妊娠してもう三ヶ月余りになるわ。鉄牛、早く老虎に頼んでおくれ。この子はお前さんのだよ。(鉄牛がかまわないのを見て)老虎、生まれたのが女の子だったら、その子を絞め殺してしまうわ！そして、お前さんのためにまん丸とした男の子を産んであげるから。(恥じることなく)ふっくらと太った、肌の白いまん丸の男の子をよ！(媚びた眼で老虎を見る)^(註27)

現在、趙禿子、鉄牛、柳条兎はみな老虎の部隊に捕らえられ、そして老虎から取り調べを受けている。

柳条兎は自分が助かりたいために自分が弟の妻、つまり身内であることを強調していることが分かる。だがこのことに、鉄牛が協力的でないと見て取ると、今度は鉄牛に見切りをつけ、老虎の気を引こうとし、鉄牛が不利になるようなことも平気で言い始める。このような態度が見て取れる。

② 〈鉄牛の「無言」の態度〉

鉄牛は、老虎の取り調べに対して、ほとんど何もしゃべることはない。ただ、自分が漢姦行為をしたことは認める。それが次の台詞である。

王老虎：(悲憤して)鉄牛、何でもかんでもやるのはよくないが、よりによって何で漢姦なんぞになったのか。

王鉄牛：(少しも構わず)漢姦は金を稼げるだろう！^(註28)

鉄牛は、漢姦になったのは「金」のためであつ

たことを告白するが、それで得たそのお金をどのように使ったのか等については語ることはない。また、命乞いをするような事も一切無い。

陳先生：(口を閉じて何も言わない、暫く経って、また鉄牛の方に歩いて行って、故意に話で鉄牛に暗示し、自己弁護をさせようとする)鉄牛、趙禿子は、お前は玉姑の兄に引っ張り込まれたのだと言っているのに、どうして中隊長にそのことを言わないのだ？

王鉄牛：(冷ややかに笑って)俺、王鉄牛は、やったことは自分で引き受ける。決して他の人に擦り付けるようなことはしない！(趙禿子を見て)その馬鹿野郎はやれるが、俺、王鉄牛には出来ない。^(註29)

鉄牛は何も答えない。もし事の詳細を答えれば、誰かを巻き込むことになるかも知っているからである。誰を庇っているの分からない。しかし、そのようなことになるぐらいなら、一切を引き受けて死んで行った方がましであると彼は考えていると解釈できる。このような鉄牛の態度を、多くの人は好ましいと思わないだろうか。

③ 〈柳条兎の話はどこまで信用できるか。〉

だから、鉄牛のこと、村で起こったことを主にしゃべるのは柳条兎である。この設定であるから、この幕では、観客は、柳条兎の性格を考慮しつつ、柳条兎の言葉から「漢姦になった理由」「村で起こった真実」等を推測する以外にないのである。他に方法はない。この作品はこのように観客が舞台上の物語の展開の中で「想像力を働かす」ように作られている。^(註30)

老虎はすでに趙禿子から鉄牛が母親を殴っていたと聞いていた。このことを実際に弟の鉄牛自身に聞く。

王鉄牛：俺に聞くな、俺は何にも知らない。

柳条兎：(協力的に)私に聞きなよ、老虎、私に聞いて、私は何でも知っているよ。

王老虎：趙禿子が言うことによると、鉄牛は俺のおっ母さんを殴ったそうだな？

柳条児：その通りよ、殴ったわ！鉄牛はね、全くどうにもならないヤツよ。私は何回鉄牛を諫めたか分かりやしない、お母さんに孝行を尽くしなさいって。でも、聞きはしなかった。本当に腹が立ったわ。^(註31)

柳条児によると、自分は母親思いの「良い子」であって、鉄牛の方は自分の忠告を無視し母親を虐待した人物となっている。

だが、これは「真実」なのか。この件も、ストーリーの展開の中で次のように理解することができるのではないか。

第一幕の展開から見れば、母親の方はもともと柳条児を嫌っていたことが分かる。だが鉄牛は柳条児が好きで、母親を無視し、彼女の言いなりになっていた。こうなれば、老牛は必然的に母親と対立することになる。母親は顔を合わせれば鉄牛に小言を言い、親子はますます不仲になって行く。このことを柳条児が知らなかったとは思われない。知っていれば、柳条児も母親のことを良く思っていず、意地悪をすることはあっても心配りをしていたとは考え難いのではないか。

その証拠に、これを聞いた趙禿子が、この柳条児を批判する。

趙禿子：柳条児！好き勝手なことを言うんじゃない！それを言うなら、お前がやった恥知らずなことを、どうして言わないんだ。とんでもない女だ！^(註32)

鉄牛は柳条児に一言も反論しない。柳条児の本当の姿を証言するのは趙禿子しかいないのである。確かに趙禿子も決して善良な人物ではないが、この鉄牛を擁護する言葉は「真実」に近いと考えても良いように思われる。「恥知らずなこと」とは一体何だったのだろうか。観客の想像に委ねられている。

④ 〈柳条児の反撃法〉

柳条児の方は自分を批判した趙禿子を容赦しない。趙禿子に反撃を加える。

柳条児：(唾を吐く)ペイ！死に損ない！お前が、あの年、老虎と諍いを起こし、村に帰ってきて、老虎の母親を一頻り罵っただろう！私が止めなきゃ、お前、母親をきつと殴っただろうね！

王老虎：おっかさんを殴ろうとしたのか？

柳条児：そうだよ。

[老虎がちょうど禿子を殴りに行こうとした時、鉄牛の怒鳴り声で押し止められる]^(註33)

今度は趙禿子が柳条児によって悪者に仕立てられる。そうして、老虎を挑発し、彼に趙禿子を殴らせようとしている。ここでも分かるように、柳条児は、しばしば体力的に勝っている、或いは立場の強い人物に取り入り、自分が気に入らない人物を攻撃させるという手段を用いるのである。

王鉄牛：この馬鹿女！それ以上二人を挑発して悶着を起こさせるなら、お前を蹴り殺してしまうぞ！

柳条児：(急に態度を変える)お前？ふん！もう私をどうにもできないよ！老虎！私の縄を緩めておくれ、(媚びる態度で)お前さんに、もっと沢山話をしてあげるよ。^(註34)

だが、柳条児が鉄牛のことを悪く言えば言うほど、逆に鉄牛は本当はそうではないのではないかと思えてこないだろうか。一方、老虎は柳条児の手段に乗せられ、捕らわれ抵抗できない鉄牛を、言われるままに殴るという、むしろ余りにも単純で、滑稽な人物の印象が生まれてしまっていないだろうか。

⑤ 〈柳条児、兄弟の母親の最後を語る。〉

この展開の中で、柳条児によって母親の最後が語られる。ただ、この話も母親の死が、まるで鉄牛の「不孝」が原因かのように仕立てられている。

柳条児：あんたのおっ母さんは、鉄牛に憤死させられたわ。それからもう一年余りになるかしら。

王老虎：何だって？おっ母さんは憤死したのか！（怒りを抑えきれず、鉄牛に近づき鞭打ち、激しい声で問う）どんなふうで憤死したのだ？

柳条児：日本兵が村に攻め入って以後、むちゃくちゃなもの奪ったのよ。ある日あんたの家にも、ものを奪いに行ったのだけど、あんたのおっ母さんは、承知しなかった。だから、日本兵に一頻り殴られたわ。それ以後、あんたのおっ母さんは、オンドルの上に寝たまま動けなくなってしまった。私は鉄牛に看病に行かせたわ。それでも鉄牛はほとんど家に居なかった。家にいても、いやいや世話をしたの。こんなふうにして何日か経ち、水も米も食べられず、程なくして、怒って死んでしまった！

王老虎：（激しく慟哭する）おっ母さん！ああ、おっ母さん！（悲しみが怒りになり）畜生、日本の奴らめ！よし、鉄牛！（孫に）引っぱり出せ！まずこの不孝なヤツを銃殺にしろ！（言い終わって、顔を覆って声を上げて泣く）

孫小隊長：はい！（返事はするが動かず）^(註35)

母親の死についていえば、最も悪いのは母親を殴った「日本兵」のはずであるが、彼らの非道ぶりは多くは語られていない。

もし鉄牛が漢姦になっていたとすれば、むしろ母親が鉄牛に腹を立て、以後母親の方が鉄牛を拒んだとも考えられる。母親が「憤死」するほど怒ったのは、自分を面倒を見ないことに対してではなく、寧ろ鉄牛が日本兵をやっつけず漢姦になったことに対してではなかったか。

孫小隊長が老虎の命令のままにすぐ行動しな

い。これは、鉄牛の人となりが高く評価し、でき得れば、鉄牛を救いたいと思っているからである。

老虎はさらに柳条児に尋ねる。

王老虎：（顔を上げ、また問う）柳条児、おっ母さんが亡くなって、どういう棺桶に入れたのか？

柳条児：「生きた棺桶」よ。

王老虎：「生きた棺桶」って何だ？

柳条児：かまう人が無くって、犬に食べられちゃったのよ。だから「生きた棺桶」に入れたということになるでしょう。

王老虎：（歯ざしりををする）なんと残酷な！でも俺はここ二年間二度家に送金したぞ。一度目は五百元、二度目は三百元。このお金はどんなふうに使ったんだ。おっ母さんに棺桶さえも買ってやらないで。

柳条児：金は全部鉄牛が使っちゃった。

王老虎：（怒りを抑えられず）孫小隊長！

孫小隊長：（ちょっと驚いて）はい。

王老虎：さっき俺は何と言った？あいつを引きずり出せ。

孫小隊長：そのことですが、夜が明けてからにしましょうよ！

王老虎：すぐやれ！これは命令だ！^(註36)

「母親」という基準から判断すれば、亡骸を放置し犬に食べさせるような弟の鉄牛の「不孝」はすでに「極悪人」のレベルに達しており、この時点で老虎の気持ちは、弟を処刑することに何の躊躇もない状態になってしまったと解することができる。

だが、柳条児がすでに鉄牛に悪意を持っていることを考えれば、柳条児の言葉で伝えられる内容がどれほど「真実」を伝えているだろうかが不安になる。もし「真実」でなければ、この柳条児の話に老虎はすっかり乗せられているということになりはしないか。

ただ、もちろん、どういう理由であれ、鉄牛が漢姦であったのは事実で、また、柳条児のせ

いもあるとはいえ、母親の近くに居たのに、結果的に、母親の面倒も充分見ず、苦痛を味わわせ、死んだ後も遺体を棺桶に入れてきちんと埋葬することもしなかった(或いはできなかった)のは事実であり、この罪は逃れられない。

⑥ 〈鉄牛の処刑〉

鉄牛は、最後まで、母親の件についても何も弁明することはなく、もしかしたらあったかもしれない兄の誤解も含め、総ての責任を引き受けて死んで行こうとしている。

再度、孫小隊長は王老虎に命令され、鉄牛の銃殺を実行しなければならなくなる。次の引用文は、刑場に引っ張って行く前の孫小隊長と鉄牛の最後の会話である。

孫小隊長：……(略)……(鉄牛に向かって)それじゃ、お前、行こうか！これは命令で、俺にはどうにも出来ねえ！

王鉄牛：(悲慘に笑う、極めて悲慘に)気にするな、気にしなくていい！でも、もし「あんた」がやってくれるんなら、綺麗にやってくれ。どうか、鉄砲の弾を後頭部から撃ち込んでくれ、外しちゃういけないよ。

孫小隊長：安心しな！兄弟、ちゃんと分かっている。必ずお前を楽に逝かせてやる。^(註37)

王鉄牛は処刑場に連れて行かれるときも態度が潔い。鉄牛は非常に気骨のあり、このまま殺してしまうのは惜しい人物なのである。

この鉄牛の「男気」は、老虎も認めていていて次のように言う。

王老虎：(彼らを送ってドアの処まで行く、悲しい声で独り言を言う)鉄牛！鉄牛！お前のその剛胆さ、まさに男の中の男だ。お前は兄貴より男気があったのに、どうして正しい道を歩かなかったのだ？もしお前も兵隊になり、日本軍と戦ったら、今日、兄貴と同じく、抗戦の好男子になっていたに違いな

い。鉄牛！鉄牛！一体誰がこんなふうにしたのだ？誰だ？誰なんだ？(ここまで言ったときに、外で二発の銃声がする。顔色を変え倒れようとする)^(註38)

観客は弟を思う老虎のこの台詞に涙するだろう。また、二発の銃声から分かるように、趙禿子も一緒に処刑された。ただ、柳条児は妊娠しているということで監獄に送られて行くことになる。

八

もし鉄牛がいかにも漢姦で、しかも極悪人であれば、彼が漢姦として処刑されることに何ら抵抗は感じない。だが、作者は明らかにそうは描いてない。なぜ敢えてこのように描いたのか。鉄牛を「悪人」に描かないことで、何を言いたいのだろうか、こうすることでこの作品はどのような主張を持つことになるのだろうか。

「漢姦」は「悪人」である。これならすぐ理解できる。だが、「漢姦」であるにも拘わらず「悪人」ではない。このようになった場合、観客の目は何処へ向かうだろうか。このように表現されれば、観客の目は、鉄牛をそのようにした「原因」、鉄牛自身にはどうしようもなかった「やむを得ない事情」の方に向けられることになるのではないか。作者はこのように計算しているように思われる。だから、作品に以下の老虎の叫びがあるのである。

鉄牛！鉄牛！一体誰がこんなふうにしたのだ？誰だ？誰なんだ？……(略)……^(註39)

では、誰が、何が、鉄牛を「漢姦として銃殺されること」にしてしまったのか。この答えは、この作品からも幾つかすぐ見つけることができるのではないか。それは、「農村の貧しさ」「農民を取り巻く周りの人間」「兵隊の負のイメージ」「村に日本軍が来た」といったことと

いうことができるだろう。このことを鉄牛はどうすることもできないのである。漢姦は憎むべきではあるが、漢姦になった農民を簡単に非難することはできないところがある。このことが分かるが故に、鉄牛をそれほど簡単に「悪人」とすることができない。作者は、このことを、鉄牛を「悪人」にしないことで、観客に気づいて欲しいと願っている。

もちろん、作者はこの農民が抱えている矛盾に触れないで作品を書くこともできたはずである。しかし、作者はそうすることができなかった。そうすれば、物語の農民の兵士が抱えている「真実」から遠ざかるからである。だからこの「矛盾」を、鉄牛を「悪人」にしないことで、そっくりそのまま表現したのである。

だが、この「矛盾」に観客に気づかせるために、作者はかなりの危険を冒しているということなりはしないか。前節で分析したように、鉄牛が立派であるということになれば、老虎の人格が相対的に低められてしまい、結果的に老虎の単純さ、滑稽さ、愚かさのようなものが強く出てくることになってしまう。この作品で、老虎は「兵隊の負のイメージ」を払拭する役割を担っているのであれば、このような表現は避けるべきではないのかと考えることもできる。

しかし、このような表現は「兵隊の負のイメージ」を払拭するという作品の目的と大きくかけ離れているように見えるが、更によく考えれば、この種の表現をすることで別の効果を生み出していることにもなるのではないか。これによって、老虎に親近感が生まれ、彼の兵士としての信頼性も高まっている。というのは、老虎は、この鉄牛が抱えていた「やむを得ない事情」をも克服して、現在の兵士になっているのであり、さらには弟の事情を理解した上で、「抗戦」の勝利という一点のために、泣きながら弟を処刑したのだと解釈できるからである。だから、やはり、この点で老虎は、危なっかしい処はあるが、信頼できる立派な人物なのであるということになるだろう。

ともあれ、漢姦であっても、自分の弟なのだ

から、兄として躊躇し、泣きながら弟を処刑するのがやはり本当の姿であって、いくら「抗戦」のためとはいえ、いきなり涙も見せず銃殺するのではいかにも「取って付けた作り物」の印象を免れないのではないか。

とはいえ、この物語には「抗戦」の側から決着をつけねばならない。結末に、次のような台詞がある。老虎は「情」の人、玉姑は「理」の人という役割で、弟の処刑の問題を次のように総括している。

王老虎：ああ！あいつは漢姦だったから、銃殺しなければならなかったのだ。

玉 姑：辛かったでしょう？

王老虎：辛いなんてものじゃなかった。自分も同じ母親から生まれたのだ。一発の銃声が鳴り響いた時には、自分も、弾を後頭部に打ち込まれたような気がした。

玉 姑：(冷静に笑って)国のために害を除いたのよ。まさに喜ぶべきことだわ。耐え難いことなんかじゃない。それでこそ中隊長の名に恥じないというものよ。^(註40)

玉姑の台詞は冷たく感じるが、このような表現で老虎を慰めるしかないのである。そして、この劇は以下の台詞で幕が下りる。

玉 姑：老虎のような軍人がいれば、抗戦は必ず勝利するわ！^(註41)

おわりに

今回は『王老虎』を取り上げ考察してきた。本論では特に取り上げなかったが、登場人物たちの言葉の使い方がこれまでの作品とは違う。例えば、登場人物たちの話し方は荒々しく、しかも罵り言葉も頻繁に出てくる。このため野卑な印象がいくらかあることは否めない。ただ、これは、この作品は河北省の農民出身の人物が主人公で、しかも兵隊の話であることを意識し

たせいでもあるだろう。だが、これが逆に非常にユーモラスで面白く、この作品の魅力でもありと見ることができる。

この作品は、よくできている。本文でも指摘したように、それぞれの幕に、ちゃんと見所が用意されている。しかも、最後の幕では、王鉄牛という人物を使って、観客の涙を誘い、物語に余韻も残している。

ただ、この作品が扱っているのが「農民」の「兵隊」であり、表現の方法に関わって、いくらか問題を含んでいるようにも感じる。以下に列記する。

- ① この作品は、兵隊の負の部分の問題にしているので、結果的に、兵隊に対する風刺が強烈に行われることになってしまう。もともとの作者の創作意図に反して、この風刺を不都合と思う人もいたかもしれない。
- ② また、農民を理想化する考え方からは、農民が漢姦行為をするという設定そのものが問題視される可能性もある。
- ③ 「農民」に対する理解、或いは同情から、弟の鉄牛は漢姦だが「悪い人物ではない」という表現の仕方になっている。この部分が「漢姦」への同情、或いは腰砕けというふうに取りられることもあったのかもしれない。

これはすべて、今回の考察からも明らかかなように、作品を正確に理解できてないところから生まれる誤解であるが、これがあるが故に、この作品が研究者、演出家に敬遠され、これまで一度も上演されず、一篇の論評もない、結果として「影の薄い」作品となってしまったのではないかと考えることもできるかもしれない。

（完）

【注】

この小論のテキストは『老舍全集10』（人民文学出版社・1999）に収められているものを使用した。したがって、以下の【注】に付されている作品のべ

ーじは『老舍全集10』の『王老虎』のものである。また、この作品は『老舍劇作全集3』（中国戯劇出版社・1982）にも収められている。

- (1) 「抗戦期」のそれぞれの劇作品について、すでに、○「老舍『残霧』試論」（八戸工業大学紀要第25号・平成18年2月）○「老舍『国家至上』試論」（八戸工業大学紀要第26号・平成19年2月）○「老舍『張自忠』試論」（八戸工業大学紀要第27号・平成20年2月）○「老舍『面子問題』試論」（八戸工業大学紀要第28号・平成21年2月）○「老舍『大地龍蛇』試論」（異分野融合化学研究所紀要第8巻・平成22年3月）○「老舍『帰去来兮』試論」（八戸工業大学紀要第30号・平成23年2月）○「老舍『誰先到了重慶』試論」（東北大学中国語学文学論集16号・投稿中）で論じたことがある。
- (2) 『王老虎』（またの名『虎嘯』）は1943年4月1日、『文学創作』第1巻6期「劇本専号」に発表された。『老舍年譜（上冊）』（張桂興編撰・上海文芸出版社p.400）参照。
- (3) 発表順に並べれば『残霧』『国家至上』『張自忠』『面子問題』『大地龍蛇』『帰去来兮』『誰先到了重慶』というものがある。これらはすべて1939年から1942年の間に発表された。
- (4) 拙論「老舍『帰去来兮』試論」（八戸工業大学紀要第30号・平成23年2月）p.36
- (5) 「農民」「兵隊」が出て来ないという意味ではない。この二つの問題を正面から扱ったものはないという意味である。小説では「兵隊」の關しては、『我這一輩子』（1937）等にも印象的に描き出されている。
- (6) 小説に関しても既に幾つかの作品を取り上げ、論じたことがある。○老舍『老張的哲学』私論（『集刊東洋学』57号・1987）○老舍『趙子曰』試論（『八戸工業大学紀要』第9巻・1990）○老舍『二馬』試論（『八戸工業大学紀要』第10巻・1991）○老舍『小坡的生日』試論（『八戸工業大学紀要』第11巻・1992）○老舍『猫城記』試論（『八戸工業大学紀要』第12巻・1993）○老舍『離婚』試論（『八戸工業

- 大学紀要』第14巻・1995) ○老舎初期作品と『駱駝祥子』(『八戸工業大学紀要』第16巻・1997) ○老舎『牛天賜伝』試論(『八戸工業大学紀要』第17巻・1998) ○老舎『文博士』試論(『八戸工業大学紀要』第18巻・1999) ○老舎『微神』試論(『八戸工業大学紀要』第19巻・2000) ○老舎『月牙兒』試論(『八戸工業大学紀要』第20巻・2001) ○老舎『蛤藻集』の「悲劇」について——消えゆく「伝統」——(『八戸工業大学紀要』第19巻・2002)等
- (7) 『老舎書信集』(百花文芸出版社) p.116
- (8) ただ、蕭亦五は戦争で片足をなくし、趙清閣は病気だった。しかも生活も苦しかったようである。(『老舎書信集』・百花文芸出版社) このようなことから考えると、この共著の場合は、この形式は、彼ら救済の意味ももしかしたらあったかもしれない。なお筆者は蕭亦五の作品の方は見てない。
- (9) 拙論「老舎『国家至上』試論」(八戸工業大学紀要第26号・平成19年2月) pp.125-126で、『国家至上』で、合作の事情は述べた。この時は宋的との共著だった。どの幕をどちらが担当したことまで述べている。
- (10) 『日中戦期 老舎と文芸界統一戦線』(東方書店)p.180
- (11) 「中国的なるもの考える9 土匪・緑林・軍閥」(福本 勝清・明治大学助教授・『蒼蒼69号』・<http://www.mmjp.or.jp/sososha/soso/soso069>)を参照した。なお、この『王老虎』p48の趙秃子の台詞にも土匪の「劉黒七」の名前が出てくる。
- (12) 『王老虎』p.3
- (13) 「好鉄不当釘, 好人不当兵」(上等の鉄で釘は作らないし、よい人は兵隊にならない)(『中日大辞典』大修館書店)は有名な諺である。
- (14) 『王老虎』pp.8-9
- (15) 『王老虎』p.9
- (16) 『王老虎』p.17
- (17) 作者の老舎も幼い頃に父親を亡くし母親の手一つで育てられたという経歴の持ち主である。この経験を取り込んでいるということは十分に考えられる。
- (18) 『王老虎』p.24
- (19) 『王老虎』p.48
- (20) 『王老虎』p.54-55
- (21) 『王老虎』p.59
- (22) 『王老虎』p.63
- (23) 『王老虎』p.63
- (24) 『王老虎』p.66
- (25) 『王老虎』p.85
- (26) 『王老虎』p.17
- (27) 『王老虎』p.94
- (28) 『王老虎』p.91
- (29) 『王老虎』p.92
- (30) このような手法は『面子問題』でも使っているように思われる。この劇でも劇の世界の背後にもう一つ世界があって、そこで思わぬことが進んでいるような気配を漂わせている。これも観客の「想像」を要求する創りといえるだろう。拙論「老舎『面子問題』試論」(八戸工業大学紀要第28号・平成21年2月)
- (31) 『王老虎』p.95
- (32) 『王老虎』p.95
- (33) 『王老虎』p.95
- (34) 『王老虎』p.95
- (35) 『王老虎』p.96
- (36) 『王老虎』p.96
- (37) 『王老虎』p.97
- (38) 『王老虎』p.97
- (39) 『王老虎』p.97
- (40) 『王老虎』p.99
- (41) 『王老虎』p.101